

# 明治中後期中学校国語読本教科書に関する一考察

浮 田 真 弓

## 1. 問題の所在

明治19年の中学校令の公布と共に、中学校で使用される教科書はそれまでの認可制から、検定制によって規定されることとなった。その後、中学校教科書については一貫して、検定制がとられることとなる。しかし、このような法規の整備にもかかわらず、当時使用された教科書は必ずしも検定合格のものとは限らなかった<sup>①</sup>。このことは、当時の検定の拘束力を考える上で留意しておいてよいであろう。

当時の教科書作成の際、参照される法的規定にはどのようなものがあったのだろうか。それは、明治19年に出された「尋常中学校ノ学科及其程度」である。「国語及漢文」として「漢字交り文及漢文ノ講読書取作文、楷行草三体ノ書写及細字ノ速写」と教科内容が示されている。教科書の内容に関する拘束はこの法規のみである。明治27年には、文部省令第7号によって「漢文ノ書取作文」が削られる。

このような基準が精密となるのは明治35年をまたねばならない。明治32年中学校令改正、明治34年中学校令施行規則が公布される。この法令中で「国語及漢文」科は「普通ノ言語文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ得シメ文学上ノ趣味ヲ養ヒ兼テ智徳ノ啓発ニ資スル」ことに目標を置かれている。(旧字体は新字体に直した)この中学校令施行規則の翌年、この目標を達するために各学年ごとに詳細な内容を記した中学校教授要目が定められる。ここでは学年ごとに具体的な作品名をあげ、時代別の割合も指定される(資料1)。

このような流れの中で、先にあげた「国語及漢文」科の目標を達成するべく編纂された教科書はどのような作品群を教材としていたのだろうか。本論文においては、この国語科の教科書として編纂された雑纂教科書の教材の出典の変遷に注目し、いつごろ教材化される作品に変化が見られるか。法規と照らし合わせることによって、法規の拘束力を明らかにする。

教授要目の拘束力は例えば教授要目が「中学校では中古文を課さないことと規定したため、当局の検定を受けなければ、現場で使用できない講読用の正読本はおもて向きこれを排除しなければならなくなったからである。」と教材文の成立年代に関して厳密に運用されたといわれている<sup>②</sup>。しかし、このような判断は厳密な調査抜きにはできないのではないだろうか。この点も問題になる。

## 2. 明治年間の教材の推移 —変化の時期と意味—

中学校国語教科書研究の中で当面の関心に関係する先行研究としては田坂、山根があげられる。

したがって、教科書と教科書に影響を及ぼした法規の関係を中心に概観する<sup>9)</sup>。

(1) 山根安太郎による「中等国語読本の定型の成立」<sup>10)</sup>

山根安太郎によれば、明治27年ごろの中学校の教材は「和文といえども古文・雅文一辺倒である。」<sup>11)</sup> その和文と並び漢文が重視され、この両文体の文章の正格を示す教科書が編集されたことを指摘している。このような教科書とならんで、「古代からのものを歴史的に編集する一形式があらわれ、のちに中学校教科書編集法の主流をなすこととなる」形式の教科書があらわれるようになる<sup>12)</sup>。いずれにしても、古文を国文ととらえた当時の教材の特徴を指摘している。

このような中であって、新鮮みを出したと、山根が述べる教科書は上田万年の『国文学』である。新鮮みのある点とは『国文学』は作文の規範をしめすのみならず、西洋の教科書にならって、文学史や読本としての教科書となっている点であると山根は指摘している。ほぼ同時期に発行された芳賀矢一・立花銑三郎の『国文学読本』でも「作品を作家と緊密に関連して学習させ、さらに文学史的地位をしらしめようとする着眼は、保守派にくらべて、あたらしい感覚にもとづく国語教育観であったことがかんがえられる。」<sup>13)</sup>

次に山根は明治35年の中学校教授要目後にだされた落合直文編『訂正中等国語読本』の目次を示して「本期の中学国語教科書の雛型としての組織がみいだされるのである。」<sup>14)</sup> 「全体の目次を通覧するだけで、もはや前代の雅文時代や文範時代を脱して、中学国文『読本』の一典型を形成していることを感ぜしめる。」<sup>15)</sup> と落合の教科書を当時の代表的教科書とし、「選択した教材の種類・領域についてみると、教授要目の規定が細密に過ぎて、むしろ動きがつかぬという状態である。したがって編集の手腕は、もっぱら、教材の編成・配列とその選択に帰着してくる。」<sup>16)</sup> と述べる。山根は、中学校教授要目と落合直文の教科書の比較から、要目の教材の種類、領域に教科書が拘束されたとしているのである。

「これによって、『国文ノ模範』はいたく『高尚』になっている。この『国文観』と、とくに『近代文学観』の未熟とは、当時の教育界における文学認識の問題であり、当然であったのだろう。ことに、中古以上にさかのぼる古典作品を欠かしめたのは、もちろん、要目の規制するところによるのである。」<sup>17)</sup>

次に、山根は三土忠造編『中学国語読本』、吉田弥平編『中学国文教科書』それぞれの第一巻を比較し、落合教科書と比較する。三土本が教授要目前年、吉田本が教授要目ののち、数年後のものであり、前者には口語文がなく、後者には増加していると指摘している。吉田本にいたって、「中学国文の世界がようやく過去の高雅な『成人調』からはなれ、小学校の読本に直結して、文学的大正調・昭和調に歩ちかづいた感じである。各巻を通覧すると、吉田本のこの近代調に達した内容が現代的清新さをあたえており、明治期中学教科書の一典型が、相当の彫琢をへてきたことを感じさせる。」<sup>18)</sup>

「これに比し、要目以前の自由な立場において、『或は花鳥風月のすさびにのみ偏し、内容空虚にして、徳操思弁に益する所少』き中学教科書に、真の『文雅的情操の修養』の資たるにたる内容をあたえんとの意気ごみで編集された三土本が意気と気骨を奨励する気魄ある編集になってい

ることは、巻一の教材編成においてもその片鱗はうかがえる。』<sup>(13)</sup>

山根は三種の教科書の比較を通じて、中学校教授要目のいわば拘束性をのべている。その拘束力は教材の種類・領域に関して強いと指摘している。特に成立年代が中古以前のものをとらないのは要目の拘束によるとしている。

## (2) 田坂文穂による落合直文編纂教科書への評価<sup>(14)</sup>

明治年間の教材の推移については、田坂文穂も調査報告している。田坂は「教科書が発足して以来、徐々に同時代人（明治期の人たち）の作品が採り入れられていくにつれてまことに徐々にであるが江戸期の教訓書や、国学者たちの擬古文はかげがうすくなり始める、やがて近代文学との出会いがはじまる、ひとたび近代文学との接触がはじまるとこれはかなり早いペースでとり入れられる、その結果おし出されて消えていくものの数も亦加速度的に増加していく筈である。」という仮説を立て、中学校用の国語科講読用教科書57点を調査した。

田坂は明治年間に一貫して採用され続けた教材をAグループ、明治初期にとられたものの徐々に影をひそめたものとしてBグループ、明治後期に盛んに取られたものとして、Cグループをあげている。

調査結果から、田坂は次のように結論づける。『土佐日記』や『枕草子』がこのグループ（引用者注-Bグループ）に属しているのは三十五年の教授要目が中学校では中古文を課さないことを規定したため、当局の検定を受けなければ現場で使用できない講読用の正読本はおもて向きこれらを排除しなければならなくなったからである。』

「三十年代からこれら（引用者注-Cグループ）を採用する教科書が急増した。『雨月物語』ほか数件を除けばすべて近代以後に成立をみたものばかりである。前にふれたように、教科書が近代文学に接触して以後かなりのペースで近代文学作品はたしかにふえてはいくけれども、いま試みに明治三十四年以後近代文学作品が採り入れられた様子を明治期に限って見ると、蘆花（79）、藤村（31）、晚翠（29）、鷗外（21）、子規（18）、紅葉（16）、独歩（9）、漱石（9）、四迷（8）、泣菫（8）（このかっこの数字は個々の具体的な作品が教科書に採収された回数の総和である。）といった程度のペースであって、古いものを排除して自己の存在を主張するにはこの程度ではおぼつかない。教材内容を近代化させるのに近代文学プロパーだけの力では及ぶがたいことをこのグループは物語る。だからたとえば大西祝のもの（20）、徳富蘇峰の「静思余録」（33）井上巽軒のもの（36）、志賀重昂の「日本風景論」（23）、三好学の「植物生態美観」（19）、丘浅次郎の「進化論講話」（25）（このかっこの数字はこれらの出典から個々の教科書に収められた教材数の総和である。）などの占める比重が特に大きく感じられるのである。この比重こそが、Bグループに属するもろもろの古いものを徐々に推し出していく力であることに疑問の余地はなさそうである。』

田坂と山根の教授要目の意味づけについてまとめると、1.中古文を課さないという要目に教科書は従っている。2.教材化する作品も要目にしたがっている、の二点である。

### 3. 教材の変化の時期特定の作業

#### (1) 教材出典の変化

田坂の研究においては、作品それぞれについて教材化された数（教科書の数）に一定の基準が設けられていない。田坂の論文の骨子が落合直文の教科書の先駆性を明らかにするものであったため、細かい数量にこだわっていない。また時期についても、明治初期、後期という漠然とした表現をもちいている。そこで、筆者は教材化された回数が10回以上の出典について、同様の作業を行った。10回以上の出典という基準はそれ以下の回数では、変化の時期を特定する材料には少ないためである。調査対象となった教科書が57点であり、全部の教科書に採録されていたならば、57回となる。それらの出典を多い順に縦軸に取り、横軸に教科書57点を取りグラフ化した<sup>(15)</sup>。

その結果、筆者は変化の時期が明治33年から明治35年であることを確認した。次に期間を通じて採録されているものをAグループ、明治33年から明治35年の期間に消えてしまった作品群をBグループ、明治33年から明治35年の期間に新たに出現した作品群をCグループとした。

カッコ内はその出典を採用した教科書数である。ジャンル、筆者、目安として成立時期の順にあげている。

#### Aグループ

- 太平記 (51) 軍記 不明 中世
- 徒然草 (50) 随筆 兼好法師 中世
- 神皇正統記 (47) 歴史 北畠親房 中世
- 駿台雑話 (47) 随筆 室鳩巢 近世
- 保元物語 (47) 軍記 不明 中世
- 増鏡 (45) 歴史物語 不明 中世
- 平家物語 (44) 軍記 未詳 中世
- 平治物語 (41) 軍記 未詳 中世
- 方丈記 (40) 随筆 鴨長明 中世
- 藩翰譜 (40) 歴史 新井白石 近世
- 常山紀談 (37) 歴史 湯浅常山 近世
- 折りたく柴の記 (36) 伝記 (自叙伝) 新井白石 近世
- 梧陰存稿 (36) 井上毅 近代
- 雲萍雑誌 (34) 随筆 筆者未詳 近世
- 梅園叢書 (33) 随筆 三浦安貞 (梅園) 近世
- 読史余論 (32) 歴史 新井白石 近世
- 東遊記 (32) 紀行・随筆 橘南谿 近世
- 十訓抄 (32) 説話 著者未詳 中世
- 今昔物語 (30) 説話 著者未詳 中古

西遊記 (29) 紀行・随筆 橘南谿 近世  
水屋集 (29) 久米幹文  
楽訓 (29) 教訓 貝原益軒 近世  
大鏡 (28) 歴史物語 未詳 中古  
琴後集 (28) 和歌・和文 村田春海 近世  
鶉衣 (27) 俳諧 也有 近世  
玉勝間 (26) 本居宣長 近世  
筆のすさび (25) 菅 茶山  
吉野拾遺 (25) 説話 筆者未詳 室町  
花月草紙 (22) 随筆 松平定信 近世  
閑田耕筆 (18) 随筆 伴嵩溪 近世  
古今集 (16) 和歌集 中古  
常陸帯 (15) 俳諧 清客堂児水編 近世  
うけらが花 (12) 和歌・文詞をまとめたもの 加藤千蔭 近世

#### Bグループ

土佐日記 (20) 日記文学 紀貫之 中古  
年山紀聞 (18) 随筆 安藤年山 近世  
十六夜日記 (18) 日記文学 阿仏 中世  
独語 (17) 随筆  
家道訓 (17) 教訓 貝原益軒 近世  
年々随筆 (16) 随筆 石原正明 近世  
大和俗訓 (18) 教訓 貝原益軒 近世  
とはずがたり (15) 日記文学 後深草院二条 中世  
近世畸人伝 (15) 伝記集 伴嵩蹊 近世  
琴園漫録 (14) 松木直秀  
松屋文集 (12) 擬古文 藤井高尚 近世  
兎園小説 (12) 随筆 滝沢馬琴編 近世  
栄花物語 (11) 歴史物語 中古  
北辺随筆 (10) 富士谷御杖 近世  
北越雪譜 (10) 随筆 鈴木牧之 近世

#### Cグループ

巽軒論文集 (23) 井上哲次郎 近代  
開国始末 (21) 島田三郎 史論 近代

樗牛全集 (20) 高山樗牛 近代  
 奥の細道 (19) 俳諧・紀行 松尾芭蕉 近世  
 自然と人生 (19) 徳富蘆花 随筆 近代  
 雪月花 (18) 大和田建樹 詞華集 近代  
 南総里見八犬伝 (17) 読本 滝沢馬琴 近世  
 譚言 (17) 随筆 幸田露伴 近代  
 静思余録 (17) 徳富猪一郎 近代  
 福翁百話 (15) 福沢諭吉 随筆 近代  
 海戦日録 (15) 小笠原長生 近代  
 進化論講話 (15) 丘浅次郎 近代  
 露伴叢書 (14) 幸田露伴 近代  
 日本風景伝 (14) 志賀重昂 近代 山岳文学  
 ななしぐさ (14) 細川潤次郎  
 日本文明史略 (14) 物集高見 近代  
 今体名家文鈔 (14) 小幡篤次郎 近代  
 天地有情 (13) 土井晩翠 詩集 近代  
 国語のため (13) 上田万年 近代  
 国土 (13) 矢津昌永  
 不尽廼舎遺稿 (13) 中村秋香 近代  
 雨月物語 (13) 読本 上田秋成 近世  
 国姓爺合戦 (12) 浄瑠璃 近松門左衛門 近世  
 日本人 (12) 物集高見 近代  
 狂言記 (12)  
 国のすがた (11) 三島通庸  
 福翁自伝 (11) 福沢諭吉 自叙伝 近代  
 新古今集 (11) 和歌 中世  
 植物生態美観 (11) 三好学 近代  
 国民訓 (10) 西村茂樹 近代  
 藤村詩集 (10) 詩 近代  
 日本工業史 (10) 横井時冬 近代

採録頻度が9回以下のものの一部の題名と回数をあげておく。

スケッチブック (6) 一話一言 (7) 雨窓閑話 (7) うた日記 (7) 雨夜燈 (6) たはれ草  
 (6) 英文学史 (5) うひ山ぶみ (5) はな (4) ほととぎす (4) ナショナルリーダー (2) 運  
 命 (2) など。

## (2) 変化とその意味

### ①中学校教授要目の内容との比較

これらの教材群を中学校教授要目にあげられた教材(資料1)と比較してみると、中学校教授要目中にあげられた作品がふえているということはない。反対に『年山紀聞』、『近世畸人伝』は教授要目にあげられているのにもかかわらず、なくなっている。また、貝原益軒の教訓書、『家道訓』、『大和俗訓』もなくなっている。が、同じ益軒の教訓書でも、『楽訓』は調査時期を通じて、教材化されている。

先行研究では、中古以前の作品がとれなくなっているとされているが、『土佐日記』が消えている一方、『今昔物語』、『大鏡』は調査時期全体を通じて教材化されている。作品によって事情は異なっている。また、近代以降に成立した文章が後半教材化されるようになっている。

変化の時期は繰り返しになるが、明治33年から、明治35年であり、法規の内容が以前から雑誌などで紹介されていたことから、公布以前に変化し始めていたと考えられる。

### ②文学の趣味を養う教材

では、この変化の意味はどのように考えられるのだろうか。田坂は引用部にもある通り「教材内容を近代化させるのに近代文学プロパーだけの力では及ぶがたいことをこのグループは物語る」として、近代化を目指す作品群と位置づけている。教材内容の近代化が何を意味するのか不明だが、中学校令施行規則の目標のひとつ「文学上ノ趣味ヲ養」う作品群とも位置づけられよう。作品ごとのジャンルで考えれば必ずしも文学とはいえないものが、Cグループには含まれているが、文学ではない作品でも当時「文学上ノ趣味」を養うと考えられた作品群であると考えられる。

## 4. おわりに ―課題と展望―

本論文においては、中等教育のうち中学校に関する法規の内容と、その反映である教科書教材の変化を比較することによって、法規がどのように実効性を持ったかを検討した。先行研究において、教科書の変化は法規の影響に帰せられている。が、法規の内容と教科書を比較すると、教科書が法規に完全にしがたって編集されているわけではないことがわかった。

教科書は一個人の編集によるものが多い。本論文では変化と変化の時期の特定を行うことを目的としたために、個々の教科書の編集者それぞれの国語観、文学観に踏み込むことはしなかった。次には、それぞれの教科書について、その編集者の特徴を踏まえて精査する必要がある。

本論文では、中学校教科書を資料に課題を設定したが、もう少し大きな文脈で問題をとらえ直すと、次のようになろう。明治35年まで、国語をめぐる状況は変化していった。特に明治33、34年の言文一致運動を経験することによって、教育者たちには、それまでの教科書教材は古めかしく、また実用性に乏しいと見られるようになる。また、「思想」の面でもものたりないとされる。その結果、教科書教材は同時代にかかれたものを多く採用することになった。そして、それらは同時に「文学上ノ趣味ヲ養」うものであると考えられていたのである。「文学上ノ趣味」がいかなるものか。それは作品の分析をまたねばならない。今後の課題である。

注

- (1) 「文部省編纂 中学校 高等女学校 現在使用教科図書表 明治40年度」によれば、未検定の教科書が使用されていたことがわかる。検定制がしかれてから、21年後にも、未検定の教科書が使用されていたという事実から、今日の検定制度のありかた（拘束性）とは異なったものであると判断できる。
- (2) 田坂文穂 『近代国語教科書史 落合直文編「中等国語読本」の研究』 1974年 私家版
- (3) 明治期中学校（中等教育）教科書の先行研究の検索には、中村紀久二氏の一連の「教科書関係文献目録」を用いた。その結果、以下の論文が検索できた。
- 渡辺正彦 「旧制中学・新制高校における文学教材の変遷について」『国語科通信18』 角川書店 1970
- 田坂文穂 『近代国語教育史1 一関根正直編近代国文教科書』の研究一』 私家版 1973
- 田坂文穂 『近代国語教育史2 一中村秋香編「中等国語読本」の研究一』 私家版 1973
- 田坂文穂 『近代国語教育史3 一新保磐次編「女子日本読本」の研究一』 私家版 1973
- 野中三恵子 「教育史における女子用（国語）教科書の研究(1)」『学芸国語教育研究8』 東京学芸大学 1991
- 野中三恵子 「教育史における女子用（国語）教科書の研究(2)」『学芸国語教育研究8』 東京学芸大学 1992
- 一色恵理 「『源氏物語』教材史の研究 一明治期中学校の場合を中心に一」『中国四国教育学会 教育学研究紀要37-2』 中国四国教育学会 1992
- 著作としては片岡徳雄 『教科書の社会学的研究』 福村出版 1987などがあげられる。
- が、筆者の当面の関心である法規と教科書内容の関係についてふれたものではない。
- (4) 山根安太郎 『国語教育史研究 一近代国語科教育の形成一』 溝本積善堂 1966年
- (5) 同上 329ページ
- (6) 同上 330ページ
- (7) 同上 333ページ
- (8) 同上 345ページ
- (9) 同上 353ページ
- (10) 同上 354ページ
- (11) 同上 355ページ
- (12) 同上 361ページ
- (13) 同上 361ページ
- (14) 田坂文穂 『近代国語教科書史 落合直文編「中等国語読本」の研究』 1974年 私家版  
この節、引用はすべて同論文。
- (15) 本論文で使用した史料は参考文献にある田坂文穂の『旧制中等教育 国語科教科書内容索引』である。この資料は、中等教育の各学校種における教科書の教材の出典を明らかにし、

出典別に配列したものである。この資料の限界は、内藤一志 「古典（古文）教材史の基礎的研究 ―出典調査(1)―」『北海道教育大学紀要 8 第一部C) 第41巻 第1号』1990によれば、①出典特定の根拠が教科書の記述によっている点、②出典の表示が作品ごとである点、③韻文の出典、作者が複数の場合、一名のみをあげている点である。同様の指摘は口頭で広島大学の吉田裕久先生にもいただいた。

また、この田坂の文献では検定教科書かいなかにこだわらず、初版本を使用しており、教科書の発行時期は、明治21年3月から大正元年12月である。しかし、現在のところ、これほど多くの教科書にあたって、出典調査したものは他に見当たらず、教材の出典の変遷を明らかにするには唯一の史料であるといつてよい。また、当時の検定制度の拘束力が不明なため、検定教科書か否かについては問わず、発行年月日によって変化の時期を判定する事とする。

片岡徳雄『教科書の社会学的研究』福村出版 1987所収の藤村正司「文学教材の出典」も同じ資料を使用しているが、筆者が同じ出典からなる教材が複数回、一種類の教科書に登場しても一回と数えているのに対して、「文学教材の出典」では別に数えている。また、時期も元号で分けている。筆者の問題関心にそって、新たに整理し直す必要があった。

作業の手続きとして、まず、出典別の目録を使用して、何種類の教科書に採録されているかを数える。次に出典別になっているデータを教科書ごとのデータにかえなければならない。データベースソフトを利用して、教科書ごとの目次に変換した。その上で、縦軸に出典、横軸に教科書というグラフを作成した。

## 参考文献

田坂文穂 『近代国語教科書史 シリーズ4』 昭和49年 私家版

田坂文穂編 『旧制中等教育 国語教科書内容索引』 昭和61年 教科書研究センター

明治書院 『日本文学大事典』作品編 1994年 三好行雄他

内藤一志 「古典（古文）教材史の基礎的研究 ―出典調査(1)―」『北海道教育大学紀要 8 第一部C) 第41巻 第1号』1990

内藤一志 「古典教材史の基礎的研究 2 ―出典調査(1)による考察と補遺―」『人文科教育研究 17』1990

（資料1）中学校教授要目中にあげられた講読の材料（抜粋）（旧字体は新字体に直した。）

### 第一学年

国語ハ小学校ニ於ケル国語トノ連絡ヲ図リ今文ヲ用ヒテ修身、歴史、地理、理科、実業等ニ関スル事項ヲ記シタル現代作家ノ平正ナル記事文、叙事文等ヲ採ルヘシ又普通今文ノ外正確ナル口語ノ標準ヲ示スヘキ演説、談話ノ筆記並ニ現代名家ノ書牘文及新体詩ヲモ含マシメテ可ナリ其ノ程度ハ文部省編纂高等学校用読本ノ第六巻及第七巻ニ準スヘシ

## 第二学年

今文 前学年ニ準シ又現代作家ノ論説文ヲ加フ

近世文 今文ニ最モ近キモノ、例ヘハ橘南谿ノ東西遊記、伴蒿蹊ノ近世畸人伝、貝原益軒ノ訓戒書類、成島司直ノ徳川実記附録ノ類

## 第三学年

今文 現代ノ思想及事実ヲ叙述論議スル今文

近世文 室鳩巢ノ駿台雑話、安藤年山ノ年山紀聞、新井白石ノ読史余論、本居宣長ノ玉勝間ノ類

近古文 鎌倉室町時代ノ文、例ヘハ保元平治物語、神皇正統記、十訓抄、樵談治要ノ類

韻文 主トシテ今様歌

## 第四学年

今文 前学年ニ準シ又詔勅、上書等ヲ加フ

近世文 新井白石ノ折焚柴ノ記、太宰春台ノ経済録ノ類、但稗史ノ類ト雖モ教育上ノ目的ニ戻ラサル限ハ之ヲ採ルヲ可トス

近古文 源平盛衰記、太平記ノ類

歌 古今和歌集ノ類

## 第五学年

今文 前学年ニ準ス

近世文 前学年ニ準ス

近古文 前学年ニ準ス

歌 前学年ニ準ス